

聖書：コリント人への手紙第二 13：1～10

説教題：自分自身を試し、吟味しなさい

日時：2025年4月6日（朝拝）

コリント人への手紙第二の最終章となりました。1節にある通り、パウロはこれからコリント教会を訪問しようとしています。それは三度目の訪問となります。それに先立って大切なことを伝えておこうとするのが今日の箇所です。1回目の訪問はコリント教会を開拓した第二回伝道旅行の時。2回目はこの手紙の1～2章に記されていた突如行った訪問です。しかしそれは悲しい結果となりました。問題を引き起こしていた本人がパウロに逆らって立ち、コリント教会のクリスチャンたちもパウロを擁護せず傍観するだけだったため、パウロは無理にその場にとどまるのは良くないと考え、早々に退去しました。このためパウロは弱々しい人間である、あれは使徒ではない！と言われることにもつながってしまいました。パウロはエペソから涙ながらにコリント教会の悔い改めを求める手紙を書き送り、それが功を奏したことを伝え聞いて安堵の内にこの手紙を書き始めましたが、どうやらその後で再び反対者たちの動きが強くなったようです。そこでこの手紙の10章以降、調子がガラリと変わり、厳しい言葉が綴られて来ました。そのパウロが三度目の訪問を前にして、ここの言葉を書いています。

彼は「二人または三人の証人の証言によって、すべてのことは立証されなければなりません」と言います。これは申命記19章15節に基づく言葉です。申命記19章15節：「いかなる咎でも、いかなる罪でも、すべて人が犯した罪過は、一人の証人によって立証されてはならない。二人の証人の証言、または三人の証人の証言によって、そのことは立証されなければならない。」なぜパウロはこのことを述べたのでしょうか。これは今回の訪問でコリントのクリスチャンたちの罪の問題をパウロが公的に処理することを考えているからでしょう。この二人または三人の証人とは誰のことでしょうか。一つの有力な見方は今回のパウロの訪問が三回目であることにこれは対応すると見るものです。三人の証人がいるわけではありませんが、パウロの訪問が3回目なので、この申命記の基準を満たしている。従ってコリントへ行って、なお状況が変わっていなければ直ちに然るべき対応に移るということです。一方、このような律法の解釈はやや奇妙である。パウロはコリントへ行ったら、この申命記の規定にその通りに従って問題を処理するプロセスに入るつもりであることをこうして告げている

のだと見る人もいます。いずれにせよ問題がそのままであるなら、これまで度々警告して来たことを踏まえて、今回は容赦しないと彼は言います。一体パウロは何をするのでしょう。それは御言葉に定められている通りの教会訓練、いわゆる戒規です。罪を犯している人に悔い改めるように勧告する関わりが重ねられても、当人がそうせず、罪の生活を続けている場合、それを放置してはならず、教会的に対処すべきことが聖書で命じられています。それは罪を犯している本人の救いのためでもあり、また教会の聖さを守り、その罪が拡がらないためでもあります。その最も厳しい対処としていわゆる除名があります。パウロはIコリント5章5節で「サタンに引き渡した」という表現をもって、これを言い表しています。あるいは当時は奇跡的な神罰が下ることもあったことが聖書から分かります。Iコリント11章30節には、聖餐式を軽んじて罪の生活を続けていたために、コリント教会の中には「弱い者や病人が多く、死んだ者たちもかなりいる」と言われています。また具体的な例として使徒の働き5章にあるアナニヤとサツピラの出来事も上げられます。彼らは夫婦で結託して聖霊を欺いたため、偽りの証言をした瞬間、その場で息絶えました。あるいは使徒の働き13章でパウロがキプロスで宣教していた時、その地の総督が信仰に入るのを阻止しようとした魔術師エルマに対して、パウロは聖霊に満たされて彼をにらみつけ、「見よ、主の御手が今、おまえの上にある。おまえは盲目になって、しばらくの間、日の光を見ることができなくなる」と語ったところ、たちまちそのようになったと記されています。このような当時に特有の使徒としてのしるしや不思議や力の現れが、この言葉の背景にあったと考えることもできます。

パウロは3節で「こう言うのは、キリストが私によって語っておられるという証拠を、あなたがたが求めているからです」と言います。コリント教会のある人たちは、偽教師と一緒にあってパウロを見下していました。「パウロは弱々しい。後からコリントに来た大使徒たちに比べて派手さがない。話しぶりもなっていない。むしろ苦しみの中にあり、哀れである。キリストの使徒らしい力ある者の姿は何か示せないのか」と要求していました。しかしパウロはこれまで見て来た通り、キリストの使徒としてキリストの足跡に従う歩みをして来ました。キリストの柔和さと優しさをもって歩んでいました。キリストが私たちの救いのために十字架への道を進んで仕えてくださったように、そのキリストに倣い、へりくだって仕える道を行くのがキリスト者の基本です。しかしいつまでもただそうあるのではない。パウロは3節後半で「キリストはあなたがたに対して弱い方ではなく、あなたがたの間であって力ある方です」と言い

ます。十字架への道を進まれたキリストは復活し、今やすべての上に高く上げられた主、教会の上に全権を持っておられる主です。ですからいつまでもご自分を侮る者たちをのさばらせたままにはしておかれませんか。やがての日にすべての人をさばく主として、またそれに先立って教会からさばきを始める主として、力を持ち、それを発揮される主です。そのキリストに結ばれている使徒としてパウロもキリストの力を発揮しなければならないかもしれません。それは教会戒規という方法を通してです。今度コリント訪れた時、以前と状況が変わっていなければ、そのことをするとパウロは警告するのです。

そのようなことにならないように、パウロは5節で「あなたがたは、信仰に生きているかどうか、自分自身を試し、吟味しなさい」と言います。コリント人たちは他の人のことばかりあれこれ問うていましたが、その前にまず自分自身を調べ、検証しなさいと言います。ここで「信仰に生きているかどうか」と言われています。これは直訳すれば「信仰の内にあるかどうか」という表現です。信仰へと導き入れられた者として、その信仰の中で生きているかどうか。これは言い換えれば次に言われている「自分のうちにイエス・キリストがおられることを自覚して」生きているかどうかということです。パウロはここでイエス・キリストがあなたがたの内にいるかないかと問うているではありません。「イエス・キリストがおられることを」と述べていますように、パウロはそのことを前提にしています。彼らがクリスチャンであることを疑っていません。ただ彼が問うているのは、そのことを自覚しているのかということです。これは私たちも問われる必要のある問いだと思います。私たちは自分の内にキリストがおられることを自覚しているのでしょうか。私たちのからだは聖霊の宮であると言われており、聖霊が私たちの内に住んでくださっています。その聖霊はイエス様が遣わしてくださった霊であり、またイエス様が私たちのために勝ち取った恵みを私たち一人一人に適用してくださる霊です。ですからその聖霊においてイエス様が私たちの内に住んでおられると言うことができます。パウロはガラテヤ人への手紙2章20節で「もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです」と言いました。そういう私たちはイエス様が私たちのうちにいてくださることに感謝して、イエス様とともに生きるべきです。イエス様と交わり、イエス様の声に聞き、イエス様のお心に従って歩むべき者です。もしそのようにするならコリント人はパウロを適格と認めるはずです。なぜなら彼らはパウロを通して福音を知り、キリストを信じる者たちへと導かれたからです。彼らが「うちにおられるキリスト」に感謝し、

キリストに従って歩むなら、自分たちをこの信仰へ導いてくれたパウロを適格な主のしもべとして当然認めることになるはずです。

7 節でパウロはコリント人たちについて、どんな悪も行わないようにと神に祈ります。これは自分たちが適格であることを明らかにしたいからではないと言います。彼らが正しい生活をすることで自分たちの正当性や適格性が評価されることを求めているからではないと。パウロはただ純粋な気持ちで彼らに善を行ってもらいたいと思っています。たとえ「私たちが不適格な者のように見えたとしても」と彼は付け加えます。これはコリント人たちが悔い改めて正しい生活へと進めば、先に触れた戒規は不要になることと関係します。彼らがもし罪の生活を続けるならパウロは戒規をもって、あるいは奇跡的な神罰を通して、自らがキリストのしもべであることを力を持って示すこととなります。しかし彼らが正しい生活に立ち返れば、そのような使徒としての力を示す機会がないこととなります。その結果、パウロはなお弱々しい者、力のない者と評価され続けるかもしれませんが、しかしそれでも良いと彼は言っているわけです。その方が良いと言っているわけです。8 節でパウロは「私たちは、真理に逆らっては何もすることができませんが、真理のためならできます」と言います。彼は神の御心に逆らうことまでして、自分たちが高い評価を得るために行動するというようなことはしません。彼の願いはただ神の真理のために働くことだけです。コリント人を祝福しようとする神の御心に仕えるだけです。ですから9 節で「私たちは、自分は弱くても、あなたがたが強ければ喜びます」と言います。彼らが祝福され、主にあって強い者とされるなら、自分が弱い状態に置かれ、また弱い者と評価されても、そんなことはどうでも良いのです。パウロは「あなたがたが完全な者になること」を祈っているとありますが、この「完全」とは「回復される」という意味の言葉です。本来あるべき状態へと神によって導かれて行くことです。そのことを見つめ、祈り願ってパウロは仕えているのです。

最後の 10 節に「そういうわけで、離れていてこれらのことを書いているのは、私が行ったときに」、「厳しい処置をとらなくてもすむようになるためです」とあります。この手紙の 10 章以降、厳しい言葉が並べられて来ましたが、それはコリントに行った時に戒規を行わなくて済むようになるためだということです。パウロに与えられている使徒としての権威は倒すためではなく、建てるためのものであることはこれまでも再三語られて来ましたが。この手紙の 10 章 8 節、12 章 19 節でも言われました。この

「建てる」という言葉は「家を建てる」という意味の言葉です。その人という家を建築し、建て上げること、つまりその成長と益のために仕えることです。あくまで罪を犯し続ける者に最終的に力をもって対処する権威がパウロには与えられていますが、それを用いることなく、その人が主の祝福の道を進むなら、それに勝ることはないのです。彼は力で相手を打ち負かすようなことはしたくないのです。しかしそれでもやむを得ない場合は、その力を使うこともあり得ます。その場合でも、それは建てるためという目標のもとでなされることに変わりはありません。

以上のパウロの言葉を読んで思うことは、いかに彼が自分のことは後回しにしてコリント人たちのために骨折っているかということではないでしょうか。彼らはパウロを通してキリストへの信仰へと導かれ、救われたのに、後からその地に入って来た偽教師たちに乗せられて一緒にパウロを批判し、中傷し、弱々しい人間と見下していました。そんな彼らに対して何と忍耐の限りを尽くし、またへりくだって、関わり続け、語り続けているパウロの姿がここにあることでしょうか。思うのは、もしかすると私たちもこのようにへりくだって仕えてくださった恩師や兄弟姉妹があって今日の自分の信仰生活が支えられているのではないかということです。私たちもここで見るコリント人のような振る舞いをしたことはなかったでしょうか。あるいは今もそんな姿をさらけ出していることはないでしょうか。そんな私たちのために心を注ぎ出して仕えてくださった方、また今なおそのようにしてくださっている方があるのではないのでしょうか。そのような方々の忍耐と労苦と犠牲と執り成しの祈りの内に自分の信仰が支えられ、祝福されていることを思うなら、私たちはそのようにしてくださった方々のことを覚えて感謝したいと思います。そしてこのコリント人のような振る舞いを、それ以上続けることがないようにしたいと願われます。むしろ私たちはパウロの勧めに従って、自分自身を試し、吟味することへ向かう者でありたいと思います。「自分のうちにイエス・キリストがおられることを、自覚していないのですか」とパウロは問いました。私たちは私たちのうちにいてくださるイエス様とともに日々歩んでいるのでしょうか。その方の御声に聞き、その方に従う歩みをいつも祈り願っているのでしょうか。他の人について云々する前に、まず自らがこの恵みに感謝し、この恵みに応答して生きることへ進む者でありたいと思います。

そしてそのキリストに導かれて願わくは私たちもパウロのように他の人々を建て上げるために仕える歩みをする者とされたいと思います。その道は決して楽ではあり

ません。不当な批判を受けてもなお低い姿勢で関わり続けるパウロの姿から多くのことを教えられます。そしてそれは何よりも私たちのために進んで十字架へ進まれたイエス様の足跡に従っている人の姿です。確かに今や復活し、力ある方であるキリストに結ばれている者たちとして、その力が明らかにされなければならない場面もあるでしょう。しかしそれは最終手段です。それよりもまずへりくだって仕える奉仕の歩みを通して目の前の一人一人が建て上げられ、また教会が建て上げられて行くというのが神が定めている方式であり、御心です。私たちも内に住んでくださるキリストに導かれて、そのような心また献身を恵まれたと思います。そしてこのパウロの後に続く者とされ、またそのさらに前を進まれたイエス様の後に続く者とされて、兄弟姉妹と教会の建て上げと完成のために仕え、用いられる特権と光栄に歩む者とされて行きたいと願います。